

第一話 人生で一番とんでもない日

カレン・ファルマは人生で一番のピンチに陥っていた。

「……………ツ、……………」

体が熱い、どんだん息が荒くなる。熱を持っているのは、奥の芯に近いところ、具体的には下腹部だ。

苦しくて、切なくて、意識してしまおうと体が勝手にうづく。

歩くだけのかすかな振動すら、今のカレンには毒だった。少しでも気を抜けばその場に崩れ落ちてしまえばいい。

涼しい秋の気候なのに、茶色のゆるい癖のある髪が汗で濡れた首筋に張り付いてやけに気になる。さわさわと撫でられているような。

体を包むワンピースは、いつもだったらなんでもないはずだ。なのに胸の膨らみ、その頂が布で擦れる感触が、ぴりりと甘い刺激になる。

「……………あつ……………」

漏れた声の淫らさに、カレンは慌てて口元に手を当てる。息が熱を持っていることは、努めて無視した。

きつと頬は赤くなつてしまつてゐるだろう。カレンのあどけなくも清楚な容貌がゆがみ、緑の瞳が涙で潤む。

遅々として進まない歩みだったが、目的の場所……神殿が見えてきて、カレンの目に希望が宿る。

ずく、ずく、ずく、体を炙る熱をどうにかできるのは、あの人しかない。

だが同時に、これから人生で一番言いたくないことを打ち明ければならないのだ。

神殿の表ではなく、治療院に直接繋がる入り口の扉にたどり着くと、カレンは急患に使われるベルを遠慮なく鳴らした。

予想通り、すぐさま扉が開かれる。

（知つてるわ、あの人なら病人を見捨てないもの）

心が喜んでしまいそうになるのを必死に押さえる。

現れたのは、カレンが待ち望んだ人、このテミス神殿の神官——司祭ユーージーン・イエレアスだった。

カレンよりも頭一つ分高い長身を、黒を基調とした祭服に包んでいる。同色の手袋までつけて肌の露出がない様は、禁欲的の一言だ。にもかかわらず、匂い立つように美しい人だった。

「神に与えられ給うた身を尊ぶべし」という教義によって、切らない金の長髪は教義通りにこめ

かみと後ろ髪の上半分を複雑に編み込んでまとめられ、背に流されている。

薄い唇は謹厳さを現し、伶俐に整った美貌は清廉で、神が手ずから創り給うたと言われても、信心深くないカレンでさえ信じてしまっただ。

なのに本人には聞かせられないが、紫水晶のような瞳は、禁欲的が故のある種の妖艶さを感じさせる。

それでも彼の一番の魅力は、外見の美しさではなく、神に対する真摯な態度と信仰心から来る実直な姿勢であるとよく知っている。

カレンが密かに憧れている、初恋の人だ。

(うう、初恋の人相手に！ 最悪すぎる)

だが、これ以外に思いつかなかったのだ。

緊張の面持ちで扉を開けたユーージンは、カレンだと気づくと紫の瞳を瞬いた。

「——カレンさん？」

戸惑いと親しみが籠もった呼びかけが耳朶に滑り込む。途端、カレンの中に燻っていた熱が、一気に膨れ上がった。

びくと、体が震え全身に甘いしびれが突き抜ける。

「……——んあッ」

こらえきれなかった声が指の間からこぼれる。

今まで耐えに耐えて下腹部に籠もり続けた熱が、名を呼ばただけであふれた——要するにイってしまったのだ。

羞恥しゆうぢと好きな人の前で醜態をさらしてしまったいたたまれなさ、解放された反動とで腰が抜けてしまい、その場に頹くずおれる。

あまりに恥ずかしくて、顔が上げられない。

「どうなさいました」

こんなひどい有様なのに、冷静に対処してくれようとするユージーンに泣きそうになる。だが、同時にまた甘いうずきがこみ上げてきて絶望した。

そうだ、告げなくてははじまらない。カレン一人ではもうどうにもできないのだ。

たとえ初恋相手だろうと。禁欲を教義とする神殿の司祭様でも！

「は……」

「はっ」

ユージーンが律儀に繰り返してくれる声にすら反応してしまうのは。

もはややくそのカレンは、顔を真っ赤にして叫んだ。

「発情の呪いをかけられたみたいなんです……ッッ！」

事の次第は数時間前からはじまる。

カレンはなじみの娼館で、薬師くすしとしての仕事をしてきた帰りだった。

二十二歳という若さで、このレイデン一の娼館をはじめとした歓楽街の店と複数取り引きしている。それは、ひとえに先代である祖母の取引先をそのまま受け継いだからだ。

カレンが開発した夜のお供の精力剤や潤滑剤などは、姐ねえさん達から安定した人気があるものの、祖母に追いつくにはまだ遠い。

そんなことをしみじみ考えつつ家路を急いでいた黄昏時たそがれどきだ。

『ええ!? こんな野暮やまぼつたい子なの!』

艶なまめかしい声がとてもし札な言葉を発した。

はっと振り返ると、カレンの背後にいたのは、この世のものとは思えないほど美しく妖艶ようえんな女だった。

黒髪は艶々と肩口から滑り落ち、豊かな胸からくびれた胴、張り出した臀部でんぶは、薄い素材でできたベビードールのようにしどけないドレスに彩られていて扇情的だ。

しかし、その耳は長く先がとがり、赤々とした瞳の瞳孔は山羊やぎのように地面と水平だった。

——魔族、という言葉が脳裏をよぎる。

瞳の無機質さにぞっとしたカレンは身を翻したが、女のほうが早かった。

『あなたは趣味じゃないから嫌だけど、しょうがないわ』

(そんなド失礼なことと言われる筋合いはありませんが!?)

反射的に叫びかけたカレンの胸に細い尻尾が巻き付き、長い爪がついと体をなぞる。

『祝福をあげる』

下腹部が焼け付くように熱くなった途端、カレンの視界が真っ白に染まる。

地面に膝をついたときには、もう女の姿はなかった。

*

「それで……夢かと思って家に帰ったら。その……体が、急にうずきはじめ、まして」

神殿に併設された治療院内の施術室で、ユージーンと向かい合って座るカレンは、熱を逃がさうと荒い息をつく。

娼館の姐さん達から教わったことがある。恥ずかしい事柄をあえて自ら言わせて、羞恥と興奮を煽るプレイがあると。聞いた当初は半信半疑だったが、本気で困る。

自分は変態ではないのだと声を大にして言いたいが、体内で燻り続ける火が大きくなっていき

そうである。

もしもじと膝を擦り合わせたら、粘度のある感触がして慌ててやめた。

音が目の前の相手に聞こえたら無理だ、心が死ぬ。というか今すぐ意識を失いたい。

患者として、説明をしなければと焦るけれど、言い淀よどんでしまうと、なかなか次の言葉が出てこない。

すると、ユージーンが口を開く。

「ためらいはわかりませんが、経緯と症状を正確に知る必要があります。男の私に打ち明けるのはつらいでしょうが、あなたの尊厳を守ることにも繋がりますので、辛抱してください」

（うう、こんな痴女にまで気を遣ってくれるなんて、ユージーンさんやっぱり優しい）

「わかり、ました」

ぎゅつと膝の上で拳こぶしを握り覚悟を決めたカレンは、ようやく喉のどから声を絞り出した。

「はじめは、なんだかわからなかったんで、自分で………してみたんですけど、いつもと違ってイけなくて」

「申し訳ありません。シてみた、と、イけない、とはどういう意味でしょうか」

なぜそんなことを聞き返す？ と一瞬頭が真っ白になったカレンは思い出した。

真摯しんしに尋ねるユージーンが、この大陸で最も戒律の厳しい正義の神を奉じるテミス教の神官だ

と。

（そ、そうだった——！ 節制と禁欲はもちろんのこと、司祭以上は生涯女性と触れ合わないだった！ 性知識ゼロでそういう単語を知らないのも当然だ！）

けして意地悪ではなく、純粹に知識がないのだ。

そういうところが素敵、と思っていたのに、そんな高潔で清廉な部分に追い詰められるとは思わなかった。

ぶわりと恥ずかしさが増すのと同時に、自分の足の付け根、秘めた部分がヒクンとうずく感触に死にたくなる。だが、話を進めなければどのみち死だ。

「男性が射精するように、女性が絶頂を覚えることをイくと表現するんです！ 自慰を試してみましたが、自分じゃ絶頂できなかったという意味です！」

「なるほど、現在のあなたは性欲を覚えるのに、自らでは解消できないのですね」

律儀に確認するのは治療者の鑑かがみだが、今のカレンにはダメージが大きすぎた。

このやり取りだけで精神は半分以上ガリガリと削れて、もはや瀕死である。

ぐったりとしながらも、カレンは沈思するユージーンの顔を盗み見る。

彼の表情には、話を疑う気配も嫌悪もなかった。

明らかに様子のおかしい発情した女が現れても、患者として扱ってくれることにほんの少しだ

け救われる。

彼は高潔で、真面目な人だ。

でなければ、祓魔師ふつましの資格を得た上、弱冠二十六歳で一つの街の神殿を任されたりしない。

(あの女も顔は綺麗きれいだったけど、ユージーンさんのほうがずっと綺麗きれいだなあ)

ほんやりと眺めていると、紫の瞳とぱち、と目が合った。

その瞳になぜか後悔のような色があった気がした。

「おそらく、私が原因です」

「え、はい？」

カレンは面食らった。

だつて一から説明したはずだ。謎の女になにかされたと。

疑問符を浮かべるカレンの前で、ユージーンは両手を握り合わせる。

「私が数日この街を離れていたのはご存じですね。実はとある魔族討伐の任務を引き受けていたのです。討伐対象の魔族は、淫欲を掻かき立て複数の人間を扇動し性交を目的とした集会を開いておりました」

「つまりそれ乱交ツ!？」

口走ったカレンは思わずその光景を想像して、ずくんと下腹部がうずくのを感じた。

入り口が切なく主張するように収縮するのが、信じられなくてうろたえる。

(そこに入れてほしいみたいなこと、なんで考えちゃったの!?)

幸いにもカレンの動揺には気づかなかったようで、ユージーンは淡々と続けた。

「魔族を崇拝する組織は壊滅させました。ですが主犯の魔族ルクスーリアは、最後まで抵抗し魅了の魔法をかけてきたのです。唯一意識の残った私が、ルクスーリアに傷を負わせましたが取り逃がしました」

「あの震い付きたくなるような美人を拒絶したんですか!？」

「私は、神にすべてを捧げた身みですので」

気負いもなく事実として言っただけのことがどれほどすごいのか。

魔族は魔物が年を経て言語と知性を得た存在だと言われている。長く生きれば生きるほど、魔力を蓄え強くなっていく。肉体が減びても、一時休眠すれば再び蘇よみがえるといふこの世の災厄である。理不尽な彼らに対抗できるのは、神々の御力を得た司祭と聖騎士のみ。だからこそ、退散させることができれば、名が語り継がれるほどの榮譽になる。

崇拜する組織ということとは、かなり大規模な集会だったに違いない。討伐隊にはユージーン以外の司祭もいただろうに、彼らは魅了に屈していたようだ。

そんな中、ユージーンが魅了を弾き、あの魔族に一矢報いた実力のすごさを感じられた。

だが、本人は忸怩たるものがあるようで、握り合わせた手に力を込める。

「ですが彼女は私に魅了が効かなかったことが屈辱だったようです。去り際、私にこう言い捨てました。『最も親しい女がほかの男達によりがり狂う様を見ても、拒絶できるか』と」

「——え」

言葉の意味が、カレンはすぐに頭に入ってこなかった。

「不覚でしたが、一瞬記憶を読み取られた感触がありました。その縁をたどり、ルクスーリアはあなたに目をつけたのだと思います」

ユージーンは申し訳なさそうに締めくくった。

「おそらく、あなたは私の心を折るために、魔族に呪われたのでしょうか」

カレンは息を呑んだ。

つまり目の前で悄然とする金髪の美しい神官は、カレンを「一番親しい女性」と言ったのか？
ずくんつと、体の一番深い場所が強くうずいた。

「——ッツ……!?」

「っカレンさん!? どうなさいましたか!」

あまりの多幸感で震える体を抱きしめてカレンが身を縮めると、異変に気づいたユージーンが焦ったように腰を浮かした。

「だ、だい、じょうぶ、です……」

息も絶え絶えになりながらも、なんとか答える。

もちろん、ユージーンのことだからただの友愛だ。勘違いはしないが、自分が好きな人の「親しい女性」の範疇はんちゆうに入っていた事実が嬉しい。

それを知って軽くイってしまったのも、死んでしまいたい気分なのに。

（——でも、足りない）

刺激が、決定的に足りない。カレンの下腹部が飢えて悶もだえて、ずくんずくと主張している。

（欲しい、なにもわからなくなるくらいめっちゃめっちゃに気持ち良くなりたい）

少し気を抜くだけで、頭の中がその衝動でいっぱいになってしまう。

自分でしたところで解消できないのはわかりきっている。それでも、指を自分の秘めた場所に当てたくなるのを我慢するため、腕を握る手に力を込めた。

それでも太腿を擦り合わせるのはやめられない。

衝動を隠せない自分が恥ずかしくて情けなくて、自然と目に涙の膜が張る。

「（め、なさい……も、つらくて……）」

は、は、と浅ましい獣みたいな息が漏れることすら嫌だったが、仕方がない。

ユージーンはあくまで労りの眼差しなのが救いだっただけ。

「……すぐに呪いを解くのは、私でも不可能です。封じを試みるためにも、ひとまず衝動を一度、解消するのが良いかと思えます。その、親しい人はいらつしやいますか」

遠回しに「恋人はいるか」と聞かれて、カレンはもはや泣きながら本日二回目の絶叫をした。

「む、無理です！ いませんし私、処女なんです——！！！！」

歓楽街を仕事先に行っているが、いやだからこそ、薬師が軽く寝てはいけないと戒めた結果、すっかり奥手になってしまった。

しかも初恋がユージーンという極上の相手で、そんなじよそこの男に惹かれることもなかった。だがそんな奥手な自分ですら、ぐらぐらと理性が揺れている。

体の奥に燃える欲情は、目前まであふれ出そうとしていた。

きつとこの理性の蓋が壊れたら、カレンは目についた男にすがりついて願ってしまうだろう。それで悦んでしまう自分が容易に想像できてぞつとした。

(そんな処女喪失絶対嫌——！)

きつと彼は、カレンが自分のせいでこうなってしまったと気に病む。

ユージーンのためにも、なんとかこの場を切り抜ける方法を思いつかねばならない。

そのとき、カレンの炙られた思考が、悪魔のようにひらめいた、ひらめいてしまった。

自分でシてもだめなら、他人の——ユージーンならどうだろうか。

「手だけでも貸していただけませんか!？」

勢いよく顔を上げたカレンは反射的に口走って、さっと青ざめた。

テミス教は姦淫かんいんも禁止している。女性の体の性感を高める行為など言語道断だろう。

嫌われてしまう? 今度こそあきれられる?

「ご、ごめんなさい冗談で——」

「良いでしょう」

静かな低い声で告げられた言葉に、カレンはぼかんと見上げる。

ユージーンは祭服の裾すそを払ってカレンの座る椅子のそばの床ひだまりに跪ひざまずくと、きつく腕を掴つかんでいた

カレンの指をゆっくり外していく。

ユージーンの美しい指に触れられて、固まっていた指が緩ゆるむと、その手を取られた。

「神は隣人の助けとなれと説いています。今のあなたは最も私の助けを必要としています。あなたを守るためにも、治療行為として、神はお許しになるはず」

(えっ嘘うそ、ほんとに!? 本当に手伝ってくれるの!?)

これは自分へのご褒美ほうびだろうか。こんな緊急時なのに、カレンの胸は否が応でも高鳴ってしま
う。

しかしカレンは忘れていた。テミス教司祭の本領を。

カレンのほのかな喜びは、申し訳なさそうながらも生真面目なユージーンの次の言葉を聞くまでだった。

「これは、贖罪です。——ただ、女性への手淫の方法を知りませんので、あなたが指示をしてくださいませんか」

「……は、い？」

間拔けな返事をしながらも、カレンはどうしてそんなことを言うのだろうか？ と一瞬わからなかった。

だが、彼がテミス教の神官……女性の体など触ったことがなく、要するに童貞であると思に至る。

カレンはこれから、この美しくも性的知識ゼロの司祭様に、気持ちの良いところを全部教えながら愛撫あいぶをしてもらわなければならないのだ。

（初心者同士の羞恥プレイはハードル高すぎやしませんか！！！！？？？）

本日三度目の絶叫は、なんとか心の中だけに留めたのだった。